



研究集録12

神戸大学教育学部附属養護学校

(Citation)

研究集録, 12:0, 2-17

(Issue Date)

1986-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009913>



研究集録12
(昭和60年度)

’85研究・実践
障害児教育の創造

神戸大学教育学部附属養護学校

も く じ

はじめに	学 校 長	1
昭和 60 年度研究実践活動の概要	研究推進委員会	4
• 研究推進の方針と総括 • 研究推進の経過		
1. 本校教育の概要.....		25
(1) 本校教育の目標	教育改善小委員会	27
(2) 教育課程編成上の諸問題		29
• 児童生徒の障害と発達の状況 • 教育実践カルテ • 教育課程構造図 • 日課表と集団編成		
2. 第 7 回障害児教育研究協議会の報告		57
• 全体会報告		
• 学部別研究協議会報告		
• 研究協議会総		
3. 教科教育・教科外教育の実践		89
(1) 生活の実践		91
• 実践目標と題材一覧 • 実践報告「ともだちとのかかわりを深めあうことをめざした授業づくり」		
(2) あそび・ことばかず、国語、数学の実践		97
• 課題別グループの編成、そのねらいと指導内容 • 実践報告「からだいっぱいを使ってのびのびと遊ぶことをめざして」 • 実践報告「一語文の獲得をめざして」 • 実践報告「見分ける力と目的的に操作する力の獲得をめざして」 • 実践報告「一歳半段階の発達の節目を豊かにのりこえるために」 • 実践報告「話しことばのひろがりをめざして」 • 実践報告「話しことばをいっそう豊かにしながら、書きことばの確立をめざす」 • 実践報告「ひとりひとりの課題を学習集団全体の課題に統一させて」 • 実践報告「生きた力につながる国語・数学をめざして」 • 実践報告「障害の重い生徒の教科へのとりくみをさぐって(Ⅱ)」 • 実践報告「読む楽しさを授業の中で」		

(3) 音楽の実践	163
・音楽のねらいと題材一覧	
・実践報告「たのしいリズム表現をめざして」	
(4) えがく・つくる、美術の実践	170
・えがく・つくる、美術のねらいと題材一覧	
・実践報告「いろいろな素材に自発的にかかわり、変化させるおもしろさを」	
・実践報告「絵を描く力の発達をめざして」	
・実践報告「高等部3組 卒業共同制作のとりくみ」	
(5) からだ、体育の実践	190
・からだ、体育のねらいと題材一覧	
・実践報告「みんながとりくめる体育の授業 マットを使ったとりくみ」	
・実践報告「みんながとりくめる体育の授業 ボール運動のとりくみ(中)」	
・実践報告「みんながとりくめる体育の授業 ボール運動のとりくみ(高)」	
(6) 家庭科の実践	207
・家庭科のねらいと題材一覧	
(7) しごと、生産の実践	208
・しごと、生産のねらいと指導内容	
・実践報告「さつまいもの栽培と収穫、珠のれんづくり (1,2班)」	
・実践報告「フラワースタンドの製作(デコパージュ装飾を用いて)(3班)」	
・実践報告「食品加工をとおして(4班)」	
(8) 特別活動の実践	228
・学部学級活動のねらいと指導内容	
・実践報告「卒業までの日々を充実したものにするために」	
(9) 養護・訓練の実践	237
・からだ、療育のねらいと指導内容	
4. 学校行事のとりくみ	指導部 241
5. 保健指導のとりくみ	保健部 247
6. 進路指導のとりくみ	進路指導委員会 255
7. 教育実習生指導	教務部 265
8. 入学選考の実施と諸課題	入学選考委員会 272
9. おわりに	研究推進委員会 280

昭和 60 年度 研究実践活動の概要

研究推進委員会

研究推進の方針（1985. 4. 26 教官会議）

1. 研究推進の基本的な方針

「生きていくために必要な諸能力の獲得と、ゆたかな人格形成をめざす」という本校教育の指針を具体化するみちが、研究実践活動の推進であることは、いうまでもないことです。また「すべての子どもは、ひとしく教育を受ける権利を有する」という日本国憲法と教育基本法の規定を完全実現化するために、科学的・民主的な教育実践を発展させていくことが、今日の障害児教育の重要な課題となっています。

附属学校として本校の果たすべき役割について、(1)地域に根ざした学校づくりをめざす(2)研究と実践の先駆的な役割りを発揮する(研究校として)(3)教育実習を中心とする教員養成の任務を負う(実習校として)―という三点の任務を確認してきていますが、それぞれにつながりを持つ課題であり、いずれもが研究・実践のとりくみと深く結びついています。すなわち、子どものゆたかな発達を願う地域の要求、父母の願いに応えていく道も、教育実習生に対する指導のなかみをゆたかにしていく道も、私たちの専門的な教育力量をつちかいていくことと切り離すことができません。研究活動を中核にすえることによって、本校の存在意義が鮮明になり、同時に、本校の課題・任務を追求していくことになるといっても、けっして過言ではありません。

このような情勢から、私たちのとりくむべき研究実践活動の方向として、(1)人格の発達をとおして障害を軽減・克服する教育を創造していくこと。(2)民主的な職場、教職員集団づくりと結合させて教育課程の自主編成―小中高一貫した教育課程を創造していくこと、が求められています。そのためには、「発達段階に即し、障害に着目し、生活実態に根ざした指導」を着実にすすめていくことが重要です。

しかしながら、日々の研究実践をすすめていくとき、教育条件の不十分さをはじめとするさまざまな困難に直面していることも事実です。子どもや父母の要求とをけっして対立させることなく、どう統一させ前進させていくか、教育という集団の事業にとりくむ指導者集団の力量も同時に問われています。私たちの学びあいこそが、子どもの発達を援助するにふさわしい専門的力量をつちかう源泉であり、研究推進の原動力としたいと考えます。

2. 研究推進委員会の組織と運営、任務について

研究推進委員会は、あえて「推進」と称するように、研究全般の円滑な推進と指導に全校的な責任を負っています。

- (1) 構成は、副校長、主事、各学部1名の委員の計7名としますが、校長の出席を要請することもあります。委員長は委員の互選としますが、委員会を統括する任務と、対外的には県養研の理事等研究活動に関して本校を代表する任務を負います。学部の委員は、学部研究の推進と同時に全校的に必要な任務を分担します。
- (2) 定例の委員会は月一回設定しますが、必要なときは、臨時に委員会を開催します。
- (3) 研究実践活動にかかわる情報を全員がもつことは、活動を円滑にすすめていくうえで必要なことであるので、「ニュース」を定期的に発行することに努めます。

3. 研究推進の具体的な方針

教育課程づくりのしごとは、日々の授業実践をつみかさねるなかでこそ生まれてくるものです。創造的なよい実践、真に確信のもてる実践をすすめていくためには、実践の基礎集団である「学部の指導者集団づくりと民主的な協議」が何よりも大切にされなければなりません。また、同時に、よい実践が教師集団を形成していくということも事実です。

(1) 学部を基礎とする研究会（学部会、学部研究会）

下記の点について、各学部で方針と計画をもち、創意あるとりくみを期待しています。そのいずれもが、基本方針で述べられている「教育目標とてらしながら、障害と発達、生活実態にみあったとりくみであるかどうか」を、方針—実践—総括の観点でなければならないことは論ずるまでもないことです。

ア. 教育目標、教育課程の検討

各学部の考え方を「教育改善小委員会」に反映させ、小中高一貫した構造をもつ教育課程となるよう努めます。

イ. 児童生徒の実態把握

ひとりひとりの障害と発達、生活実態をとらえ、発達課題と指導のありかたを集団討議の中で明らかにしていきます。従来の「教育実践カルテ」（個人別）については名称、活用の方法、形式の統一等みなおしをします。発達診断の方法についても、小中高統一していく方向をめざします。

ウ. 指導計画の作成

年間計画、学期計画、単一時間計画など、計画と方針をもって実践にとりくむようにします。

エ. 授業研究

指導案を作成し授業について深く考えてみる機会をもつことは、教育実践の力量をつちかう何よりの方法です。また、授業をみる力を養い、相互に授業から学びあう場としたいものです。指導案のかきかた等についても検討をくわえ、授業を組織していく観点については、年度はじめのおそくない時期にあらためて提起いたします。

オ. 実践の総括

実践の総括を文書であらわすことは、力量をたかめることと切りはなせません。学期ごとの「実践記録」年度末の「実践報告」を求めますが、様式・まとめ方等についても検討をくわえます。

カ. 授業の準備・教材研究

総括をふくめ、指導者集団の協議をだいにしていきます。

以上、学部を基礎とする課題をあげましたが、学部にまたがる課題も当然おこってくることと思います。そのときは、学部をこえての研究会を設定します。

(2) 全体研究会

全教で課題を研究し、共通理解を得るために、全体研究会の必要性があります。今年度は下記の趣旨で全体研究会を実施します。

ア. 学部研究のとりくみについて（6月中旬）

／教育学部の特殊教育研究室の指導をうける。

イ. 学部研究のとりくみの中間総括（10月上旬）

／県教育委員会と協議（合同研とかねる）

ウ. 研究協議会の報告、提案内容について（11月中旬）

エ. まとめ研（3月上旬）

(3) 自主研究会

日々の教育実践を支える自主的なグループによる自主研究と位置づけます。研究推進委員会は時間と予算の保障するにとどめます。どこまでも自主研の趣旨にもとづき、自主・民主・公開の原則のもとに運営されることを望みます。運営等についてグループより要求のあるときは、研究推進委員会として協議します。

(4) 研究集録 Ⅻ 12 の刊行について

今年度の研究実践活動のまとめを「研究集録Ⅷ12」として刊行します。編集方針、内容等については12月に提起します。

(5) 新着任教官研習会について

研究推進委員会は「本校の研究実践の到達点と課題」について講話を行います。

4. 対外的な研究会の実施について

(1) 県教委合同研究会

研究協議会にむけてのとりくみの一環として位置づけます。しかし、単なるうちあわせ会的な色彩にならないよう、本校のとりくみについて理解いただき、実践をすすめていくうえでの諸課題について意見交換を行うことにします。時期の設定等、実行委員会と協議をかさねながら準備をすすめていきます。

(2) 学部教官合同研究会

本校の場合どのように限定しても、障害児教育にかかわる学部のスタッフとの関係を強化し、本校の研究推進に関係させるという観点を意識的に追求していかなければなりません。今年は、研究協議会にむけてのとりくみとあわせて実施していきます。内容、ねらいについては、私たちの研究実践上の課題と一致させていく方向をめざすことは当然です。

(3) 研究協議会

附属学校の存在意義、本校に課せられた課題の追求を具体的に提起するかたちとしてまた、附属学校どうしの学びあう場を提供するという趣旨で、第7回研究協議会を11月15日(金)に実施します。本校の場合、「研究発表会とはせず」という第1回研究協議会以来の趣旨と経過を尊重し、障害児教育にたずさわる多くの人々と一同に会し本校のとりくみを提供しながら協議をするという内容にします。なお、準備、運営等については実行委員会に委ねます。研究推進委員会は、研究協議会にむけてのとりくみにのみ傾斜していくことのないよう留意していきます。

また、年度末総括にもとずき「研究協議会は隔年実施とする」という方針をあらためて提起します。

(4) 明石養護学校との合同研究会

経験交流の会を実現すべく努力します。

5. 研究推進を支えるその他の任務について

(1) 研究出張について

研究出張は、他の多くの実践や理論を学び、私たちの研究実践内容をたかめ発展させていくための機会であり積極的に保障していきます。研究出張にかかわる総括的な調整と推進については、研究推進委員会が責任を負います。

ア. 下記の研究会については研究推進委員会として参加を要請します。

- ・ 県養研、近精養の各研究部会、およびその所属校の研究会
- ・ 教大協特殊教育研究会、教大協近き地区特殊教育研究部会、およびその所属校の研究会
- ・ 神戸大学教育学部附属学校園の研究会

イ. その他、必要な研究会等については、研究推進委員会として参加を要請します。

ウ. 個人、自主研、学部から研究出張の要請があったときは、研究推進委員会が協議のうえ決定します。

エ. 研究出張の成果をみんなのものとするために、研究推進委員会に、その報告を提出します。

旅費予算については、59年度を下まわらないよう要求します。

(2) 研究図書、研究室の整備について

ア. 5月と11月に研究図書購入希望の集約を行います。その決定については、希望を尊重しながら研究内容、分野等の観点を考慮して研究推進委員会が行います。

イ. 夏期休業中に書庫の整理と図書の点検を行います。

購入予算については、59年度を下まわらないように要求します。

とりくみの反省と次年度の方針(1986.3.18 教官会議「年度末総括」)

1. 研究推進の基本的方針について

〔障害児教育の今日的課題と本校の課題〕

1986年は、本校の前身である附属明石小学校に特殊学級が開設されて30年目(養護学校としては18年目)という、ひとつのフシメともなる年である。生活経験主義を教育課程編成の基軸とした適応主義になつ「特殊教育の時代」から、権利としての障害児教育が叫ばれた時代、そして今日のすべての障害児の全面発達をめざす教育の創造へと、戦後のわが国の障害児教育発展の歴史を、本校もまた30年のあゆみのなかにみることができる。「障害と発達に視点をあてた教育内容と方法の創造」という研究主題を基盤にして、子どもひとりひとりの発達課題を明確にしながら

実践をすすめる、教育課程づくりをめざそうという1978年(昭58)からのとりくみは、今日の障害児教育をめぐる諸情勢からも、その重要性がいよいよ増しているといえる。

日本教育大学協会(教大協)特殊教育部会は、1983(昭58)から二部三部合同研究集会の統一テーマを「重度化・多様化への対応／子どもの発達と障害に視点をあてて」と設定し、「教育課程の編成、発達診断と指導法」を重点的な課題として提起していること、また、私達と同じ任務と課題を負っている全国の附属養護学校の研究テーマからもそのことがうかがわれる。すなわち、その研究テーマに多少の文言の差異はあっても、「子どもひとりひとりの障害と発達をみつめ、教育内容と指導のありかたを探る」という教育課程編成の課題をかかげている。一方、兵庫県下でも障害児教育の現状と課題として「教育課程編成の時期」であるとして、「これからは、一人一人の障害と発達段階に応じた教育課程を編成し、授業を創造していく時期を迎えている。すなわち、『授業で勝負する時代』といえる」と、県教育委員会の担当責任者が述べているが、従来の「能力と特性に応じた教育」から「障害と発達段階に応じた教育」への指摘は、障害児教育に科学の光をあてるものとして注目されるべきであろう。^{※1}^{※2}^{※3}

今年度、教育改善小委員会を組織し、「私達が展望をもって働ける指針を」という趣旨から、本校の教育方針の見直しが行われた。「本校の役割と任務、教育目標、教育方針」新たに設定確認され、第7回研究協議会では対外的にも明らかにすることになった。これらを具体化していくとりくみに着手するスタートの年が1986年度である。なかでも、本校の任務の第三項「地域の障害児教育の一端をになう」というなかみを、また教育方針の第五項「障害児教育一般、および地域の学校教育一般への寄与を展望する」というなかみを追求して具体化していくことが求められている。同時に、「豊かな人格形成とは何か」についても実践を通して考えていかなければならない課題である。昨今の、いわゆる「いじめ」問題を頂点とする人格と発達の歪みを、障害児教育の分野からどう提唱していくか、教育方針と直接結びついた課題であるといえよう。1986年は、国連の提唱による国際障害者年10年計画の折り返し点にあたる。1981年国際障害者年教育推進協議会が提唱した「障害児教育拡充発展のための施策のあり方」の第2項に養護学校の組織・機能として「地域における障害児の教育のセンター的機能を果たすこと」と述べられているが、この面からも「地域にねざす学校づくり」という本校の役割がいっそう重要であるといわなければならない。

地域の要求と同時に、父母の複雑で多様な教育要求をうけとめ、父母との協力関係を確かなものとしていく基盤を研究と実践を通してつくりあげていくことも、看過できない今日的な課題である。とりわけ、後期中等教育の充実と卒業後の進路保障に関する研究は、きわめて切実な全国

的な課題となっているが、本校でも育友会が中心となって進路対策のとりくみに今年度より着手されているが、このことと結合させながら高等部教育の充実をめざしたとりくみも、私達の研究と実践上の重要な課題であることを提起しておきたい。

今年は研究協議会の実施の年となり、それにむけて力を集中してきたことは、私達の教育力量を大きく向上させることにつながった。次年度は「実施しない年」となるが、力量をたかめていく視点を「対外的」な面から「内的」に移し、再来年（1987）実施の第8回研究協議会実施の成功にむけて蓄積していくことが求められている。なお、私達の研究と実践の活動は「民主的な職場、教職員集団づくりと結合させながらすすめられなければならない」と、今年度も方針として提起してきたが、教育という集団の事業にとりくむ「教師集団の形成」は、なによりも大事にしていかなければならないこと、また、よい実践をつくりだしていくことが、よい教師集団をつくりだしていく道であることを改めて提起したい。そして研究推進委員会がその先頭にたつ責務を負っているといっても過言ではないと考える。

以上のような、障害児教育の情勢と今日的な課題また本校のかかえている課題から、障害児教育の充実と発展をめざす私達の研究実践の課題として、「障害、発達段階、生活実態に即した科学的・系統的な教育内容、方法を創造する研究」をひきつづき追求していくことを提起する。

※1 全国国立大学附属学校連盟特殊学校部会編：特殊学校部会名簿（1985）

※2 辻重五郎（兵庫県教育委員会義務教育課心身障害児教育係長）「本県における心身障害児教育の現状と課題」（1985・12 兵庫教育：兵庫県立教育研修所発行）

※3 「能力と特性に応じた教育」から「障害と発達にみあった教育」への方針の転換は、本校では1981年である。（学校要覧による）

2. 研究推進委員会の組織と運営、その任務について。

年度当初の研究推進委員会において、組織の確立（委員長選出、任務担当の決定）と、今年度の活動方針および年間計画について協議立案し、4月教官会議に提案し承認を求めた。委員会は承認を受けた方針にもとずき、当面する課題の具体化のため月一回の委員会を定例化してきた。全教官に、また各学部で提起する責任を負っているが、本校の課題、障害児教育の情勢、そして研究実践の到達点・進展状況、あるいはつまずきなど常に把握しておく必要性を痛感する。そのために委員会は常に各学部の「今かかえている問題点」を出しあうことから始めたが、学部を統括し全校的な視野にたつ主事の参席は欠かせない。学部を基礎とする研究と実践が大きな位置を

占め、研究活動が本校の存在を鮮明にし、中核になるという点からも主事が研究推進委員会に参加することは論をまつまでもないことであろう。学部の委員は、学部研究会の推進のため大きな力を発揮してきた。委員長は委員会を統括する責務と同時に、研究推進面で本校を代表する立場から県養研の役員の任務を対外的に負う必要がある。

研究推進委員会の構成員は、上記の理由から今年度と同様とするが、組織確立に一定の困難さを呈してきた過去の歴史的な経過を承知しながら、全校的な学校運営組織づくりのなかで検討されることを望む。

「研究推進ニュース」は、委員会の議題予告とその報告、研究出張報告、当面する課題についての提起、学部研究会のようす等を中心的な内容としてきたが、活動を円滑にすすめていくうえで一定の役割を果たしてきたのではないかと考える。次年度も継続してとりくまれることを期待する。

3. 研究推進の具体的なとりくみについて

〔学部を基礎とする研究会〕

研究協議会に焦点をあてて、方針と計画をもちながら各学部とも創意あるとりくみを展開することができた。年度当初には、発達検査を中心にした児童生徒の実態把握を行い、児童生徒ひとりひとりについて発達課題、援助の方向、指導方針を学部の指導者全員の協議で「教育実践カルテ（個人別）」を作成し、日々の実践に活用していくことにした。全校生を、発達のフシメをめやすとして統一した検査を実施し、本校在籍児童生徒の「発達の状況」を明らかにしたこと、また「教育実践カルテ」の様式を全校的に統一していったことは、今年度のとりくみとして特記しておきたい。それらをもとに、各学部とも指導計画を作成し教育課程づくりをめざす基礎をきずくことができた。また、教生に対する指導授業を授業研究の機会として位置づけ、指導案をもとに授業前研究会を設定し授業についてつっこんで考える場をもった。実践の総括を文章で書きあらわすこととして、学期各の「実践記録」を作成し、年度末には「実践報告」として研究集録に掲載するというとりくみにつなげることができた。

以上のように、毎日の授業実践を大切に活動を支盤にしてきたが、不十分な点や私達のもつ弱点についても率直に提起しておかねばならない。ひとつは、「実践の総括」に対するとりくみの弱さである。授業前は密度のたかい研究会を実施するが、事後研究会が軽視されていること、実践記録の作成には非常な力を出す、作成することのみにとどまりがちになっていること、また、実践報告も個人的な力量にまかされている等の指摘がそれである、ひとりひとりのがんばり

が、みんなのものとなっていない、すなわち、集団の財産となっていないという点である。時間の保障ともかかわる物理的な条件が、それらを困難にしていることは十分承知しているが、このことを克服していかないかぎり教師集団づくりがすまないことは自明であり、次年度はこの点について相互に知恵をだしあい少しでも前進したいと願っている。ふたつめには、その実践の総括をすすめる中心的な支えとなる「学習の不十分さ」を指摘するこえも多い。障害のとらえかた、発達のとらえかた、発達検査を発達診断とするみち、また、それを実践に生かす方途等、基本的ななかみについて未だ力不足であることは否めない。「知を力と」していくために、いっそうの学習が望まれる。その他の問題点や課題として、全校的に様式を統一した「教育実践カルテ」ではあるが、「かたちをととのえるだけに傾斜してはいないか」という指摘も否定しがたい。作成の手順、実践への活用等の点について「日々の教育実践にいかすために、カルテを真にカルテとするために」という当初のねらいにたちかえり、検討されるべきであろう。

〔学部研究会以外のとりくみ〕

6月に「授業づくりの観点と指導案の作成について」、「本校のあゆみと課題（研究集録Ⅷ11をもとに）」というテーマで、11月に「研究協議会の提案・報告内容について」というテーマで全体研究会を実施した。研究協議会を控えての課題であったので、計画した当初のねらいは不十分さを残しながらも達成できた。この種のいわゆる全校的な課題をもつテーマでの全体研究会の必要性は否定できないが、実践をもちよって全員で協議するような全体研究会も必要である。それは、実践をもちより全員で研究協議を行う全体研究会も学部研究会とは違った観点から力量をつちかう場となると考えるからである。同時に、ここ2年間実施できていない「全校授業研究会」のとりくみがある。授業づくりから学ぶことも、授業をみる側からも、実践力をたかめらうえできわめて大きな力を発揮するものとする。また、教育実習生に対する指導の点からも必要欠くことのできないものである。次年度実現にむけて努力したい課題である。

「自主研究会」が組織されて3年がすぎた。継続して成功させるためには、非常に質的にたかい集団としての力量が問われる課題であるが、年度末に各研究グループでの総括の提出を求めた。

教科等研究会、に発展的解消したらどうか、教科等研究会や学部研究会ではまかないきれないものが自主研究会ではないか等、そのあり方、位置づけについて多様な論があるなかで、学部を越えて自主的に集まる場として積極的な評価がされている。「自主・民主・公開」の原則にたって次年度も継続していきたい。ただ、年度当初のグループ編成にあたっては、研究推進委員会は「組織づくり」をすすめる観点から若干関与することも必要である。

今年度の本校の研究と実践のとりくみを、年次記録としてまとめるという趣旨で12月に「研究

集録Ⅻ12」の編集方針をもち、各教官の要求にもとづく実践報告を募り、2月にその大要を明らかにすることができた。非常勤講師を含むすべての教官からの実践が報告されること、また執筆者を明記することにしたことは、昨年度につづき特記すべきことである。なお、今年度は研究協議会を実施したので、その記録についても掲載することとした。

今年度はじめてのとりくみとして、4月1日に新着任教官研修会を実施した。本校の歴史と、研究と実践の到達点と課題についての説明が中心的な内容となったが、これは毎年継続して実施されなければならない課題であり、また、そのなかみについてもより豊かに充実したものとなるよう創意工夫したい。なお、新着任教官に対して学習の文献を指定し準備するなど必要ではないかと考えている。

4. 対外的な研究会の実施について

県教委合同研究会は、両者の日程を調整することが困難となり、当初の計画のように実施できなかった。その結果、研究協議会における「学部別研究協議会」の司会者助言者会議を学部研究会として行ったが、そこに参加していただき本校の研究と実践について学部単位で協議するというかたちとなった。1979（昭54）、1980（昭55）に実施したのと同様の方式となった。研究協議会が隔年実施という定期的開催となった現在、県教委合同研究会を設定した（昭和51）当初の理由は薄れてきているのではという指摘もあるが、^{※1}「地域の学校」という本校の役割、また研究協議会を開催の際、後援を依頼するという関係からも、例年実施し本校の教育について理解いただき、研究を通してつながりを強化していくことは大切な課題である。その観点からすれば、おなじ後援団体となっていただく神戸市・明石市・加古川市の各地教委の関係者にも参加を要請し、本校の実情と研究と実践のとりくみについて相互に意見を交換しあう機会とすることは、意義あることと考える。

附属学校である本校の場合、学部の特殊教育研究室との関係を強化し、本校の研究推進に関係させるという観点を意識的に追求していかなければならないことは当然である。今年度は研究協議会にむけてのとりくみと結合させながら実施していきたいと計画したが、学部別研究協議会の打合せ会的な協議を中心にしたとりくみしかできず、不十分であったことは否めない。教育実習生に対する指導、学部学生¹の修論・卒論研究に対する協力、学部での講義等、本校の任務からみて直接のつながりをもってきたが、私達の研究と実践の課題を一致させながら研究協議をすすめていくことを、なによりも大事にしていかなければならないし、学部と附属との関係はそこに存するといえる。また、それ以外の学部研究室とのつながりをつくっていくことも同様に考えている。

そのすすめ方については、より具体的な内容で早期に計画し、学部との協議を積みかさねていくことが肝要となろう。いずれにしろ、学部とのつながりをつくり強化していく「研究会」を、次年度の最重点的課題としてとりくみ、そして前進のあることを期待する。

本校としてはこれまでにいちばん長い3年という期間を空けた研究協議会であったが、11月15日、第7回目としての研究協議会を実施することができた。総括の詳細は「実行委員会」に移すとして、277名の参加者のあったことは本校に対する期待の大きさであるにとらえることもまちがいではないであろう。学び合う場を提供しようという主旨は達成できたと評価している。そして何よりも、本校の果たす役割を具体的なかたちとして対外的に示しえた事実を大切にしたいと考える。研究推進委員会としては、「何を学んだのか、何がこれからの課題となるのか、また、私達のもつ弱点も率直に」という総括指針にもとずいて意見交換を行ったが、これまでのとりくみを確認し整理するよい機会となったこと、障害児教育の現場の問題や課題をおたがいに知り合う機会となったとする指摘は、積極的な評価としてうけとめたい。また、協議題を狭めていくことの必要性が助言者等からも指摘をうけたが、私達の研究や実践の方向を絞っていくことが現段階で必要なことなのか、必要とあらばどう絞るのか、2年間の見通しをもちながらすすめていくことの大切さについては確認している。あわせて、日常の学部研究会のつみあげを研究協議会につなげていくための推進上の課題についても、研究推進委員会として特に追求していかなければならないであろう。そして、学部、とりわけ「特殊教育研究室」との研究と実践をすすめていくうえでこのつながりを強化していく必要性が強調されていることを指摘してきたい。

明石養護学校との経験交流の会は、条件の一致をみない等の関係で実現できなかった。木の根学園との交流も視野にいれながら、教職員どうしの気楽なつきあいを大事にし積みかさねていくことが必要ではないか。ひきつづき追求すべき課題である。

今年度は、教大協近畿地区特殊教育二部三部合同研究集会の実施当番校が本校にあたり、三学期に入^るっての、1月17日に本校を会場として行われた。午前中は全学部授業を公開し、午後は5分科会に分かれて研究協議を実施した。分科会テーマは、全国大会（11月、愛知教育大附養）と同一の「教育課程の編成、発達診断と指導法、ことばの指導、進路指導と職場実習、附属養護学校のあり方と教育実習」を設定したが、研究推進委員会は、本校担当の分科会に責任を負う立場から司会と提案者をだし、集会成功のためその役割りを果たすことができた。

※1 障害児教育の歴史も浅く、本校の存在も対外的に知られておらず、また、研究協議会も不定期開催であったため、県教委とのつながりも弱かった。このような「孤独感」がある中で、県教委合同研が始められた。

※2 教育学研究科、神崎一子「精神発達遅滞児と健常幼児の象徴遊びに関する研究」

他8の協力依頼があったが、今年度は過去最高であった。本校児童生徒に対する実験研究、保護者へのアンケート依頼が中心となっている。

5. 研究推進を支えるその他の任務について

研究会の案内、責任出席の要請、参加希望の集約と調整、出張報告の依頼と集約等、研究出張にかかわる総括的な把握を研究推進委員会の任務担当者が担当してきた。すべて報告を求め研究推進ニュースに掲載することにした。校務との関係で出張にくい条件が残っているが「他から学ぶ」という主旨が生かせるよう努力したい。なお、今年度研究出張旅費の予算額を越えるという事態を年度末に引き起こしたが、全校的に旅費予算を調整することで補った。計画と見通しをもってとりくむことが何よりも要請される。

研究図書購入予算は30万円であったが、27万7500円執行した。年間三回にわたり購入希望図書を募る機会を設けたが、希望図書がでてくるのが少なかった。研究推進委員会では検討の結果、希望書はすべて購入することにした。他校ではみられないとりくみであるので高価な図書は購入を申し出るようにしたい。二学期末「図書登録台帳」と照合する総点検作業を実施したが、行方不明図書が308冊(19.4%)にもおよんでいる。研究推進委員会としては発見に努めているが全教官の協力をお願いしたい。また、利用後は必ず元に戻すという規律を確立していきたいと考えている。

(文責 研究推進委員長 津田充幸)

昭和 60 年度／研究推進の経過

月	研 究 会	授 業 研 究	研 究 推 進 委 員 会
4	11. 学部研究会 19. 学部研究会 25. 第 1 回自主研究会		1. 第 1 回研究推進委員会（組織の確立一委員長選出、委員の担当任務を決定） 9. 第 2 回研究推進委員会（今年度の研究推進活動方針と年間計画） 10. 研究推進ニュース№ 1 15. 研究推進ニュース№ 2 22. 研究推進ニュース№ 3 25. 研究推進ニュース№ 4
5	16. 学部研究会 23. 学部研究会 30. 第 2 回自主研究会		2. 研究推進ニュース№ 5 7. 研究推進ニュース№ 6 9. 研究推進ニュース№ 7 13. 研究推進ニュース№ 8 14. 第 3 回研究推進委員会（学部研究推進一実践上の課題と研究の方向、研究出張予算、研究図書購入） 16. 研究推進ニュース№ 9 20. 研究推進ニュース№ 10 21. 研究集録発送作業 27. 研究推進ニュース№ 11
6	12. 第一学期全体研究会 「授業づくりの観点と指導案の作成」 「本校のあゆみと課題」 一研究集録 № 11 をもとに 27. 第 3 回自主研究会	10. えがく・つくる （小：米沢） 11. しごと一工作班 （中：足立） 11. 数学一課題別 D 2 （高：三木）	3. 研究推進ニュース№ 12 5. 学部特殊教育研究室と協議 （研究協議会、教大協研究集会） 6. 研究推進ニュース№ 13 7. 研究推進ニュース№ 14 7. 第 4 回研究推進委員会（学部研の課題、全体研究会実施計画） 10. 研究推進ニュース№ 15 17. 研究推進ニュース№ 16 26. 研究推進ニュース№ 17 30. 研究推進ニュース№ 18
7	4. 学部研究会 12. 学部研究会（小・中） 学部（特殊教育研究室）・ 附属養研究会（高） 25. 学部研究会（中・高） 30. 学部研究会（高）		2. 第 5 回研究推進委員会（学部・ 附養研究会の実施計画、夏期休業中の研究推進活動について） 3. 研究推進ニュース№ 19 4. 研究推進ニュース№ 20 8. 研究推進ニュース№ 21 15. 研究推進ニュース№ 22
8	2. 学部研究会（小） 3. 学部研究会（中） 29. 学部研究会（中）		17. 第 6 回研究推進委員会（県教委 合同研実施計画、第二学期の研究推進活動の日程）
9	5. 学部研究会 12. 学部研究会 19. 第 4 回自主研究会		3. 研究推進ニュース№ 23 第 7 回研究推進委員会（研究協議会にむけて一公開授業、報告提案要項） 5. 研究推進ニュース№ 24 9. 研究推進ニュース№ 25 10. 研究推進ニュース№ 26 13. 研究推進ニュース№ 27 18. 研究推進ニュース№ 28 25. 研究推進ニュース№ 29 30. 研究推進ニュース№ 20

10	8. 学部研究会 17. 学部研究会（学部教官と協議会の報告内容について協議） 24. 学部研究会	1. 数学一課題別 D （中：米田） 2. 生産一三班（高：松永） 3. 体育（小：中田） 研究協議会／公開授業 小：体育 ことば・かず・あそび 中：音楽 基礎・国語・数学 高：体育 生産	1. 第 8 回研究推進委員会（研究協議会－公開授業、学部別協議会全体会報告） 3. 研究推進ニュース№ 31 9. 研究推進ニュース№ 32 14. 研究推進ニュース№ 33 21. 研究推進ニュース№ 34 28. 研究推進ニュース№ 35
11	5. 学部研究会（司会助言者会議－県教委、神戸・明石・加古川市教委と研究協議） 6. 全体研究会（研究協議会の報告提案内容） 15. 第 7 回障害児教育研究協議会 20. 学部会（研究協議会第一次総括） 21. 第 5 回自主研究会	19. 基礎・国語・数学 一課題別 B（中：原） 20. 学級活動（高：大宮） 20. ことば・かず・あそび 一課題別 B（小：広石）	5. 研究推進ニュース№ 36 11. 研究推進ニュース№ 37 12. 第 9 回研究推進委員会（研究協議会のとりくみ最終確認と、総括の視点について） 14. 研究推進ニュース№ 38 18. 研究推進ニュース№ 39 20. 研究推進ニュース№ 40 22. 研究推進ニュース№ 41 27. 研究推進ニュース№ 42 29. 研究推進ニュース№ 43
12	13. 学部研究会		2. 研究推進ニュース№ 44 6. 第 10 回研究推進委員会（研究協議会総括、研究集録№ 12 の編集について、第三学期の研究推進の日程、教大協研究集会のとりくみ） 9. 研究推進ニュース№ 45 13. 研究推進ニュース№ 46 20. 研究室整備、研究図書整理
1	16. 学部研究会 17. 昭和 60 年度教大協近畿地区特殊教育二部三部合同研究集会 30. 第 6 回自主研究会		10. 第 11 回研究推進委員会（第三学期学部研究会のすすめ方、研究集録の執筆担当） 13. 研究推進ニュース№ 47 21. 研究推進ニュース№ 48 27. 研究推進ニュース№ 49 30. 研究推進ニュース№ 50
2	6. 学部研究会 13. 学部研究会 20. 第 7 回自主研究会	17. ことば・かず・あそび 一課題別 B（小：西村） 19. 家庭（中：朝田） 19. 体育（高：森）	4. 第 12 回研究推進委員会（第三学期学部研究会の課題、研究集録の内容第二次案） 7. 研究推進ニュース№ 51 10. 研究推進ニュース№ 52 18. 研究推進ニュース№ 53 25. 研究推進ニュース№ 54
3	13. 学部研究会		3. 研究推進ニュース№ 55 4. 研究推進ニュース№ 56 5. 研究推進ニュース№ 57 7. 第 13 回研究推進委員会（昭和 60 年度総括） 13. 研究推進ニュース№ 58 14. 研究推進ニュース№ 59 26. 第 14 回研究推進委員会（研究集録編集作業）